

# たまのよこやま



令和2年度企画展示 **リケイ考古学** ますます好評開催中！

巻頭特集

令和2年度行事報告

遺跡だより

北区栄町貝塚



3ヶ月の休館を経て6月1日から再開館した東京都立埋蔵文化財調査センター。「三密」防止のため、体験行事や講演会に関しては当初開催を見合わせていましたが、8月以降さまざまな工夫によって感染防止対策を講じながら、可能なものから行事を再開してまいりました。今回は11月上旬までの行事についてご紹介したいと思います。

### 夏休み 親子体験教室

再開当初の8月はちょうど夏休み期間でしたので、親子を対象とした3つの体験行事を行いました。

#### トントンたたいて縄作り

最初に開催したのは小さいお子様でも参加できる縄作りの行事です。植物（カラムシ・アカソ）の乾燥させた茎を横槌で叩いて繊維を取り出し、取り出した繊維を撚って縄を作ります。材料の植物は当センターで育てて、乾燥させておいたものを使用しました。難しい技は必要なく、地道に叩いて行くのですが、どのグループも親子協力して立派な繊維を取り出すことができ、その後、縄文土器に文様を付けるための縄（縄文原体）に仕上げました。作業前には実際に生えているカラムシ・アカソも見てくださいました。



#### 火おこし道具づくり

火おこし道具づくりは毎年人気の企画です。まず職員手作りの舞錐キットを組み立て、ノコギリ等を使って火きり板を作ります。ここまでが道具作り。でき上がったら、自分たちで作った道具を使って火起こしです。舞錐を火きり板に当て回転させる



のですが、火種ができるまではそれなりに力も時間も必要です。できた火種を炎にするときは、普段は息を吹きかけていくのですが、飛沫感染防止のため、今回は職員自作の脚つき金網に火種を入れ、うちわで扇ぎました。直接火を扱う機会が少なくなっているこの頃では、子供たちには貴重な体験です。無事全組火起こしに成功し、盛況のうちに終わりました。

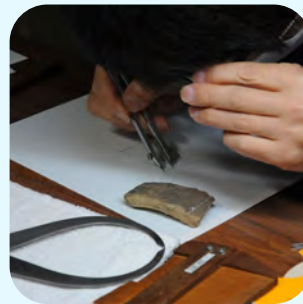
#### リケイ考古学ワークショップ

3つめは今年度の企画展示「リケイ考古学」に合わせたワークショップです。テーマは縄文土器に混入した種子の痕跡（<sup>あっこん</sup>圧痕）さがし。シリコンを使って種子のレプリカも採取する本格派のイベントです。まずは実際の縄文土器片が大量に入ったコンテナの中から種子の穴の空いたものを見つけ出します。圧痕を見つけ出したら次はレプリカ作りです。最初は練習用の圧痕の付いた粘土板で練習し、最後は自分で見つけ出した土器の破片からレプリカを取っていきます。初めての作業ですが、シリコンを混ぜるのも注射器でシリコンを圧痕に注入するのも、驚くほどみなさん器用にこなし、レプリカを完成させていました。



#### 考古学講座

考古学講座は、実際の考古学の発掘・研究の場で行われている作業を実習形式で体験して頂く、通常よりも高度な内容のイベントです。今年は縄文土器の観察・図化方法をテーマに行いました。最初に実際の土器片を使って縄文土器の分類を行い、遺物の見方に対する理解を深めました。その後、実測図（遺物の正確な図面）の作成、トレース（実測図の線をトレーシングペー



パー上でなぞって見やすい図をつくる)、拓本(遺物表面の模様を墨で紙に写し取る)等、実際の発掘成果の整理段階で必要な作業を学んでいただきました。

### 自然観察会

こちらも毎春秋に恒例の人気行事です。今年は春がコロナで中止となりましたが、秋の会は満を持して10月に開催することができました。毎回外部の植物の専門家を講師にお招きして行っている行事ですが、今年に変則的に当センターの学芸員が、縄文時代の人々の植物利用の仕方など、考古学的観点からの説明を交えながら庭園をご案内いたしました。普段とは違う雰囲気での観察会でしたが、参加者の方には新鮮に感じていただけたようです。



### 講演会

講演会は11月末日時点で3回開催しています。うち2回は企画展「リケイ考古学」に関連して外部講師をお招きしたものです。第一回は東京都立大学の岩瀬彬先生に「石器のキズと旧石器時代の生活—最終氷期最盛期の日本」というタイトルでご講演いただきました。実験と顕微鏡観察により、石器について細かなキズから旧石器時代の人々の生活を復元するという先端的な研究に関する内容です。第二回は奈良文化財研究所の山崎健先生が講師で「ホネ考古学—古代の都の動物利用」という演題です。藤

原京跡から出土した骨(動物・魚・人間)の観察から明らかにされた、文献には残らないような意外な事実をご紹介頂きました。2回とも大変興味深い内容で、参加者の皆様にもご満足いただけたようです。

もう一つの講演会は当センターの昨年度の発掘成果をご紹介する「遺跡発掘調査発表会」です。3月開催の予定がコロナ禍により延期されていましたが、9月に開催することができ、紙上発表を含む6遺跡の成果を皆様にご紹介することができました。



いずれの行事でも、コロナウイルスの感染防止対策として、人数制限を設けつつ、必要に応じてアクリル板等の設置などの対策を行いました。講師と参加者の接近を避けつつ作業説明をするため、講師の手元をビデオ撮影してプロジェクタで大画面に投影するなどの工夫も行っています。例年と違った形での開催を余儀なくされた部分も多く、人数制限のために参加をお断りしなければならない場合が出るなど、なかなかご期待に添えないこともありますが、概ね参加者の方にはご満足いただけたようです。今後はさらにより安全に楽しく学べる行事となるよう努力して参りますので、ぜひご参加ください。

(武笠 多恵子・舟木 太郎)

## 東京文化財ウィーク2020 都指定有形文化財特別公開報告 多摩ニュータウン No.513 遺跡出土の板碑

東京文化財ウィークは、文化財をより身近に感じていただくため、毎年10月から11月にかけて都内各所の文化財の特別公開や文化財関連行事等を実施する東京都の事業です。

当センターでは、本年度の文化財ウィークに合わせて都有形文化財に指定されている多摩ニュータウンNo.513遺跡出土の板碑(中世の供養塔)を展示しました。No.513遺跡からは経塚や火葬墓等も見つかり、中世を通じた霊場だったことが分かっています。大きな板碑が並ぶ様に、中世の信仰世界の一端を感じて頂けたのではないのでしょうか。



所在地 : 北区栄町5番地

調査期間: 2020年3月~2021年10月(発掘)

調査面積: 955㎡

栄町貝塚(北区 No.51 遺跡)は東京都北区の南東側、武蔵野台地の北東端「本郷台」と崖線を介して連続する東京低地の西端、崖線直下の標高5m前後の微高地に立地しています(図1)。

「ムラ」から離れた海岸近くに立地するいわゆる「ハマ貝塚」であり、国指定史跡中里貝塚を含む中里遺跡にも隣接しています。中里貝塚は縄文時代中期から後期初頭にかけて当時の海岸線に形成された大規模な貝塚です。厚さ4.5m以上の貝層と貝の加工に利用されたと考えられる遺構が発見されており、栄町貝塚も中里貝塚と関連する貝塚と想定されています。

現在調査を行っているのは、南北2つの調査区のうち、南側のB区です。令和2年10月現在までに調査区全体の3分の1を調査しました。

貝層は地表より約1.5m前後掘り下げたところで確認されました。南北方向のトレンチを設定し貝層掘削を行ったところ、南側から北側にむけて貝層が厚く堆積している様子がみられ、最も堆積しているところでは厚さ約1.5m前後を測ります。確認された貝層の多くが粉々になったカキを主体とする破碎貝層ですが、下の層へ移るにつれてカキだけでなくハマグリ等も含まれるようになり、またそれらが大きい破片や完形で出土する混貝土層へと変わっ

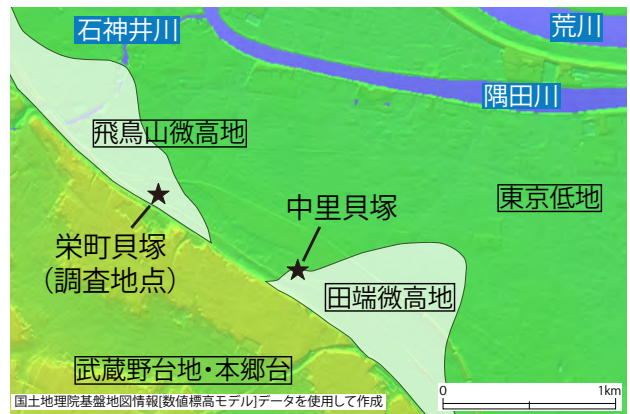


図1 栄町貝塚の位置

ていきます。(図2)。貝層の断面からは、細かく破碎した貝が面をなして堆積している箇所(写真1)や、焼けて?灰色がかった貝が堆積している箇所がみられます。また、特定の種類の貝が集中的に堆積している箇所も確認されました(写真2)。当時の人々の活動を反映したものであるかどうか、現在調査中です。

現段階では、貝層の形成された時期を示す遺物の出土は限られていますが、縄文時代中期~後期の土器がわずかながら出土しています。

栄町貝塚での調査は、貝塚の規模、中里貝塚との関係性、中里貝塚を中心とした地域の縄文時代の土地利用のあり方など、さまざまな問題を明らかにしていく上で重要です。(中島 一成)



図2 B1 トレンチ西壁断面図(S=1/60)

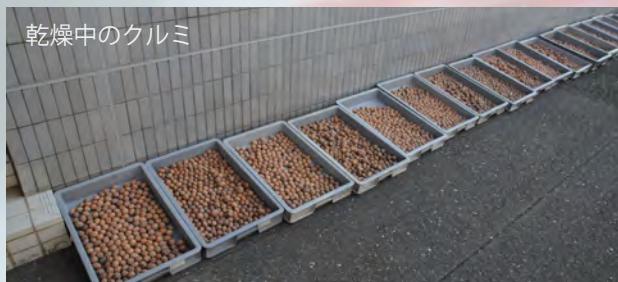


写真1 破碎貝が面をなして堆積している様子



写真2 集中的に堆積するハマグリとシジミ

東京都立埋蔵文化財調査センターに併設されている遺跡庭園「縄文の村」。そこで観察できる動植物たちについて、広報学芸担当の調査研究員が独断と偏見で(?)ピックアップしていきます。



乾燥中のクルミ

さて、今年の秋も多くの植物が実をつけました。遺跡庭園は、多摩ニュータウン遺跡群の発掘成果に基づいて縄文時代の植物を植樹・展示した場所ですから、縄文人も食べていたであろう木の実もたくさん生ります。

まずはクルミ。今年も園内各所に植えられたクルミはたくさんの実をつけました。今年は残念ながらコロナで中止となりましたが、クルミ割りなど様々な行事で活用されています。クルミの青い実は核果とも呼ばれ、外側に柔らかい果皮、さらにその内側に硬い核があり、その核の中に種子があります。普段目にする食用のクルミはこの種子の部分です。ですから外側の果皮は拾ったら外します。当センターでは、水につけて腐らせて、中の核だけを取り出し、1~2か月乾燥させて、翌年利用できるように保管します。民俗例では、地面に埋めて腐らせるなど様々な方法があるようですが、さて縄文人はどうやって中身だけ取り出していたのか、気になるところです。



今年とれたアケビの実

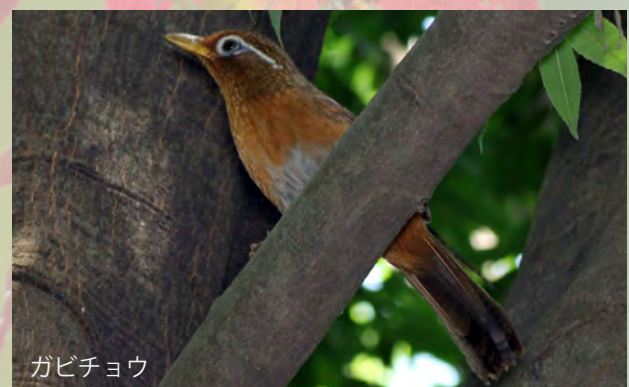
また今年も、園路から観察できる位置にアケビの実が生りました。わずか一つでしたが、鳥などに食べられることなく、無事収穫することができました。

さて増えるとうれしいものばかりではありません。例えば、ガビチョウという鳥。20年程前から見かけるようになった鳥ですが、近年では庭園の笹藪で繁殖しているらしく、今年も雛が数羽群れて跳ねている(ガビチョウはあまり高く飛ばないので)光景が見られました。一見すると微笑ましくもあるのですが、ガビチョウは特定外来生物に指定されている生き物。本来多摩地域にはいなかったばかりでなく、ウグイスなどの生息域を脅かすため、その営巣は悩ましいところですよ。

これから冬に向けて、庭園はいきもの達の姿が減り木々の葉も落ちて、傍目にはやや寂しい時期になっていきますが、実は庭園内を観察すると、落ちたドングリをついばむ鳥たちや、春に向けて冬芽や花芽を準備する植物たち、冬をさなぎで越す蝶など、いきものたちの冬を乗り切る上では絶好の機会です。寒さで外出も億劫になる(私だけ?)頃でもありますが、ぜひ冬の庭園にもお越しください。

(追記)現在の遺跡庭園の様子は、「庭園だより」として、東京都立埋蔵文化財調査センター Twitter にて不定期で発信しております。私たちの目に留まったあれやこれやをご紹介しますので、最新情報はそちらをご覧ください。

(佐藤 悠登)



ガビチョウ

## かゆい所に手が届く

# 遺物の基本的な見方 石器編③

石器は長きにわたって人類の生活を支えてきた道具のひとつです。特に、石を打ち欠いて作る打製石器は、金属素材のなかった旧石器～縄文時代においては欠かせないもので、当センターの展示でもさまざまな種類の打製石器が並べられています。

ところが、一般の方からは「これのどこが道具なの?」「ただの石のかげらにしか見えない」といったご意見をいただくことも多くあります。確かに、現代の生活では目に触れる機会のないものですし、石器の専門家ならともかく、普段、石を打ち欠くなどという経験はない方が普通です。そこで今回は、旧石器時代の細石刃さいせきじんと細石刃核さいせきじんかくを例に、打製石器の見どころについて解説したいと思います。

写真1 左の逆三角形のかたまりが細石刃核、右の細長いかけらが細石刃です（センター常設展示に



写真1 細石刃核（多摩ニュータウン No.769 遺跡出土）と細石刃（多摩ニュータウン No.388 遺跡出土）

て展示中)。いずれも黒曜石という火山由来の天然のガラス質の石が素材です。このうち、道具として使われたのは細石刃の方で、骨や角で作った軸に埋め込んで槍先に使われたと考えられています（写真2）。さて、問題はもう一方の細石刃核。一見するとどこに人の手が加わっているのかわからず、石のかたまりにしか見えません。しかし、その見方がわかると、旧石器時代人の智慧や石器づくりの技術の高さをはっきりと読み取ることができるのです。

もう一度、細石刃核の表面に注目してみてください。ピーラーで皮をむいた後の果物のように、縦の筋が何本も見えます。実は、これは細石刃核の上面の縁ふちを正確に叩いて細長いかけらはを剥ぎ取った痕あとなのです。写真3は、石のかたまりの縁に鹿の角を押



写真2 細石刃の装着例

し当てて細石刃を作った実験製作の細石刃核です。実際に細石刃を剥がすと、剥がされた石のかたまりには、本物同様に縦長の筋が残りました。細石刃核の表面はこのようにできたものだったのです。

そしてさらに細石刃核を観察すると、縦の筋がいくつも規則正しく並んでいることが分かります。これは、たくさんの細石刃を連続して剥は離りしたことを示しているのです。限られた石材からなるべく無駄なく、たくさんの道具を作り出していた旧石器人。現在よりも厳しい環境の中で生き抜くための智慧と技術のかたまりが細石刃核に見られるのです。

数万年にも及ぶ旧石器～縄文時代の中では、細石



写真3 細石刃を剥離した痕（実験製作資料）

刃の他にも様々な剥離の技術によって作られた石器が見つかります。石器の専門家は、その割れ口を観察することでも、石器を作る意図や製作技術などを読み解いてきました。展示室で石器をご覧になる際には、ぜひ割れ口を探してみてください。中には割れ口の観察の難しい石器もありますが、様々な角度から眺めることで、石器づくりの工夫が見えてくるはずですよ。

（佐藤 悠登）

多摩ニュータウン No.435 遺跡は八王子市大字越野<sup>おおあざごしの</sup>字吹上<sup>あざふきあげ</sup>にあり、昭和 62 年（都埋文報告第 12 集第 5 分冊）に尾根から南側を、平成 4 年（同上第 27 集）に尾根の北側を対象に 2 度調査しました。

1 次調査で、旧石器時代の礫群<sup>れきぐん</sup>、縄文時代の土坑、古代の竪穴住居跡、近世の塚や道路跡、炭焼窯<sup>がま</sup>などを調査し、2 次調査で、縄文時代の土坑、古代の竪穴住居跡などを調査しました。

この遺跡は、江戸時代の「塚」や「炭焼窯」に特徴があり、今回は「塚」についてお話しします。

塚は東西に長く延びた尾根の稜線<sup>りょうせん</sup>上の、旧鎌倉街道とも俗称されていた細道に沿って 9 基ありました。この道は、八王子市の地籍図に残る赤道<sup>あかみち</sup>（古くからの生活道路）です。また、塚のある地点から尾根に沿って東側に北八幡神社、西側に玉泉寺<sup>ぎくせん</sup>の別当の諏訪神社と稲荷社もありました。発掘調査で諏訪神社の基礎（現在はお寺の境内に移設）も調査されています。さらに西に行くと現帝京大学八王子中・高等学校の手前に、土饅頭の塚が 1 基と「お稲荷様」が祀られていました（現在は不詳）。また、No. 435 遺跡の西に接する No. 105 遺跡の西側の谷中に、明治初期まであった普願寺<sup>ふがんじ</sup>、さらに西に導儀寺<sup>どうぎじ</sup>なども建っていた宗教色の強い土地柄です。

調査した塚は 9 基ですが、並び方は昔の村境の入会地<sup>いりあい</sup>や山道に沿って並び列と途中から南側に枝分かれした列の二筋がありました。塚は全て土を盛っただけでした。いずれの塚も中央に土饅頭のように土を盛り、塚の間も含めて全体を覆うように盛土で埋められていました。南へ分岐した塚との間から室町時代（天正 20 年銘）の宝篋印塔<sup>ほうきょういんとう</sup>の基礎、蓋<sup>かさ</sup>、相輪<sup>そうりん</sup>が出土しましたが、深い土坑<sup>どこう</sup>を掘って埋めたわけではないようです。列の一番南側で、最も大きな塚も土を何段か盛っただけでしたが、頂上<sup>たぬま</sup>の中央に狸掘りの穴がありました。ひょっとしたら、後世の人が古墳と間違えて盗掘した穴かも？

そして西側から 2 番目の 1 基だけ、土盛の下<sup>した</sup>の地面を



方形に掘り込み、その窪みに約 9 万点の小さな河原石が敷き詰めてあり、約 3,300 点の石に墨で 1 字から十数字の漢字や梵字<sup>ぼんじ</sup>などの経文<sup>きょうもん</sup>を書いた「経石」が埋納<sup>まいな</sup>されていました。これを「一字一石経」と言います。

平安時代から江戸時代中頃の風習として、自分自身の死後の冥福<sup>みやくしゆ</sup>を祈る「逆修」のために、「経文や梵字（仏様など）」を書いた石等を塚に埋納することがあります。この塚の経石が埋納された時代は、文字の書き方から江戸時代中頃と考えられます。

塚の周辺には、平安時代の竪穴住居跡や旧石器時代の遺物集中部（No. 105A 遺跡）

など、さまざまな時代の遺構が見つかっています。江戸時代の人たちも不思議なものが見つかる特異な場所と認識していたのかもしれませんが。村字の境の入会地であり、前述のように信仰の場所として利用されていましたが、いにしえ人の供養と功德を頂く施設として塚も作られたのでしょうか？



(上) 一字一石経出土状態  
(右) 出土一字一石経

多摩ニュータウン内には、他にも塚が見つかる遺跡はありますが、これだけ立派な「一字一石経」が発見された例はここだけでした。江戸時代のパワースポットでしょうか？

ここからは余談。遺跡の南斜面下には江戸時代からの炭焼窯が多数見つかりました。石窯と土窯があり、石窯は白炭（類似に備長炭など）を作ったとのこと。炭焼窯については、別途お話しする機会があればと、

（小坂井 孝修）



# 後世に伝える術<sup>しゅつ</sup>

## —企画展示 **リケイ考古学** に寄せて—

「光あるところに影がある。まこと栄光の陰に数知れぬ忍者の姿があった。」筆者に近い世代であれば、この往年のアニメ冒頭の台詞に胸躍らせた記憶が蘇るのではないのでしょうか。調査現場や貴重な出土品を前に熱く語る考古学のエキスパートを「光」に例えるならば、資料管理や保存に関わる者は差し詰め「影」。健全に保たれた埋蔵文化財の裏側には、そうした影の存在による数多の努力が潜んでいるのです。



そもそも“歴史遺産を伝える影”の活躍は、今に始まったことではありません。例えば、奈良・東大寺の正倉院御物は最たる例の一つでしょう。大小の劣化があるにせよ、千二百年も前の品々が、今尚、私たちの眼を魅了し続けて止まないのは、悠久の時の流れの中で、絶えず点検し、必要に応じて手当てしてきた多くの「影」がいたからに他なりません。そして、そんな無名の人達が駆使してきたのが、忍術ならぬ“リケイの術<sup>じゅつ</sup>”でした。

正倉院には品々を納めていた「唐櫃<sup>からびつ</sup>」という精巧な木箱が206合伝わっているそうです。「木箱のどこが術なんだ」と思われるかもしれませんが、どうして。外部からの衝撃を防ぐことは勿論、埃等による汚れ、虫害、光による褪色なども軽減してくれますし、何より湿度が日々大きく変動しても、箱の中なら穏やかな状態に保つことができます。木には、材になった後も、周囲の湿度に併せて吸放湿する調湿の性質があるからです。自然の摂理を巧みに応用した、なんと素晴らしい保存法ではないですか！

また、宝物が現在の近代宝庫に移される以前は、「曝涼<sup>ばくりょう</sup>」といって、秋の穏やかな日を選んで陽や風に当てる作業が毎年行われていました。太陽光には劣化の原因となる紫外線が多く含まれ、長くこれに晒<sup>さら</sup>すことは慎むべきなのですが、短時間であれば、害を及ぼす黴<sup>かび</sup>や虫を殺す効果もある。現代のIPM(総合的病虫害対策)にも比し得る術<sup>じゅつ</sup>を古の人達が

経験的に会得していたというのは正に驚きです。

古より、人は、草木、金属、岩や土など様々な素材を駆使して、多くの価値を創造してきました。ただ、それが故にその保存も一筋縄ではいかない。様々な自然現象に学びながら、如何に良い状態で残すかを常に考え、時に試行錯誤してきたからこそ、多くのモノがその姿を後世に永らえてきました。伝統的保存方法とは、こうした数知れない“リケイの術”の結晶、いわば「奥義書<sup>おうぎしょ</sup>」のようなものなのです。

そして、その営みは今日なお続いており、埋蔵文化財もまた例外ではありません。劣化しにくい土器や石器とて、収集情報がきちんと管理されずに放置されてしまえば「残してある」とは言えません。地震をはじめ、様々な災害への対処も怠ることができない。また、今は失われてしまった遺構を知る縁となる図面や写真フィルムに対するケアも然りです。最近ではデジタルだから大丈夫と高を括るのも危険。紙の図面や写真は劣化に応じた復元が可能ですが、デジタルの場合は、単なるメディアの損傷以外にも、ウイルスやサイバー攻撃、メディアの形式・OS等のバージョン・アップなど、実に様々な要因で、即復元不能な状態に陥ってしまいます。今後、ますますハイテク化していく調査成果＝遺跡の記憶を残すためには、“リケイの術”のさらなる進化が喫緊の課題と言えます。

皆さんも、素晴らしい発掘調査現場や出土品に接する機会があった時には、これを後世に伝えるために努力する「影」や「術」にも、ほんの少しだけ思いを馳せてみてください。(できれば“エール”も…)

(長佐古 真也)



正倉院正倉

※今号の表紙：細石刃と細石刃核、そして石器実験製作用の鹿角です。詳しくは p.5 「かゆい所に手が届く」で！

